東海学院大学研究年報　6　(2021)
info:doi/10.24478/00003743

【論文】

自由表現への変換に伴う保育者の意識の変容
－運動会発表に向けた取り組みに焦点をあてて－

大城順子[1]・近江望[2]・十良澤成美[3]
（１：東海学院大学人間関係学部，２：吉備国際大学心理学部，３：共立女子中学高等学校）

要　約

自由な身体表現を通して子どもたちが自分の感情や思考を表現する機会を設けることは広く教育現場において奨励されており，ダンスはその最も有効な手段の一つであると考えられている．しかし，多くの学校では依然として定型的なダンスを教える傾向にあるのが実情である．理由の一つには，教師自身のダンス経験の不足，特にリズミカルな音楽を使用した自由表現活動の経験が不足していることがあげられる．幼児教育の現場に自由表現のダンス活動を効果的に取り入れるためには,この不足している経験を補うような方策を幼稚園や保育園及び教育者に施す必要性が考えられる．

本研究では,自由表現のダンス活動に対する保育士自身の意識に着目し，経験が不足している保育者がより経験豊富な指導者による模範指導を観察することで生じた意識の変容過程を分析した。本研究は，自由表現を新たに取り組み始めた私立保育園において実施され,四歳児と五歳児を対象に行われた模範となる自由表現活動を担任保育士が観察した．観察後は模範指導者と観察者による事後検討会を行った．データとしては，毎授業時の映像撮影・検討会の逐語記録・保育士による授業観察を収集し，研究対象は 2019 年 6 月から 8 月にかけて，3 回行われた授業実践(全 3 回)と事後検討会(全 3 回)とした．

観察と検討会の過程を経た結果，指導経験が不足していた保育士も子どもたちが音楽に合わせて踊るのを楽しむ様子や表現豊かな姿に気づき，自由表現の良さへの理解がみられた．定型的な表現活動と自由表現の活動の際の子どもの様子の違いに気づくことで，保育者自身の自由表現に対する意識の変容がみられた．

キーワード：幼少期教育，身体表現活動，表現リズム遊び，アクションリサーチ

Ⅰ．はじめに

幼稚園教育要領の「表現」の領域では,感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむことがねらいの一つとして挙げられている.また,「健康」の領域では,自分の体を十分に動かし,進んで運動しようとすることが示されている.幼稚園や保育所の教育・保育において,幼児が音や音楽が聞こえてくると身体を動かして喜びや楽しさを表現している様子からは「身体表現」の発達が期待される.そして,この身体表現の学びを発表する場として多くの教育・保育の現場では「運動会」「体育祭」が活用されている.

戦後から日本の学校教育において「運動会」「体育祭」での表現ダンス演技は大会演目の一部として多くの幼児・児童・生徒に踊り継がれ,日本のダンス教育の中心を担ってきたといえる.しかしながら,この体育祭における振付ダンス(以下:体育祭振付ダンス)には問題点が指摘されている.“体育祭振付ダンスの練習とその本番”を持って体育科「表現運動」の単元を行ったことにするという学校文化の暗黙の了解が存在することである[8)10)].また,教師の一斉指導による振付を教え込む指導[6)]やメディアで見受けられる既存のステップを模倣させる指導[7)]も課題として指摘されている.

幼児教育現場においても安田[13)]は「振りつけのある曲,あるいは曲に保母が振りつけたものを一方的に教えこみ,そろってきれいに,見栄えのするように練習を重ね,当日に備えたもの」,飯田[4)]は「既成の音楽に振りをつけたものがほとんどである」と同様の指摘をしている.

大西[9)]は幼児教育における「表現リズム遊び」小学校教育における「リズムダンス」中学校,高等学校における「現代的なリズムのダンス」(以下:リズム系ダンス)には「指導内容及び教材には大きく3つの特徴がみられた」としている.それは「1つめは既存の動きや振り付けを取り上げるもの」「2つめは,即興的で自由な動きや振り付けを取り上げるもの」「3つめは,既存の動きや振り付けを

工夫したり創作したりするもの」である.そして,「これまで創作ダンスの指導に関して自由であるため指導が難しい[2) 5)]という指摘がなされてきたことを鑑みれば,リズム系ダンスの指導においても,『自由』に踊らすことは現場では嫌厭され,既存の動きを扱う実践がみられるのではないだろうか」と指摘している.

このことから, 大西[9)]が2つめに挙げる,リズム系ダンスにおける「即興的で自由な動きや振り付けを取り上げるもの」(以下:自由表現)は青木[1)]山崎[12)]や本間[3)]の実践などにとどまり,今後のさらなる実践と報告が期待される.

本研究のフィールドとなる私立A保育園の運動会では,例年「表現リズム遊び」を披露しているが,運動指導に来る外部講師が用意した作品の振付・構成が持ち込まれ,園児が直接指導を受けた後,担任保育士が日々の保育の中で復習練習を繰り返してきた.そこには自由表現はないため,園長や主任保育士からは「表現」の領域のねらいである「自分なりに表現して楽しむ」表現リズム遊びの実践から「音や音楽が聞こえてくると身体を動かして喜びや楽しさを表現している様子」を望む声が挙がっている.

そこで本研究の準備段階において園内研究会では新たに「表現リズム遊び」の教材を研究して,担任保育士による指導の下,運動会の演技発表につなげていく提案がされた.しかし,これまで担任保育士たちは自由表現の指導経験がないため,舞踊教育学の研究者(大学教師)Bが園児への指導を通して教材を提案して,まずは保育士の意識の変容に取り組む形となった.そして,教材の改善方法の1つとして,授業ごとに指導者と観察者が検討を繰り返すアクションリサーチの手法が有効であると考えた.

本研究では,4・5 歳児に対して実施された「表現リズム遊び」の自由表現を担任保育士が観察者となってどのように感じ,教材の可能性をどのように意識するのかアクションリサーチの手法を用いてその変容を検討していくことを目的とした.

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象と調査方法

2019 年 6 月 21 日～8 月 28 日にかけて,私立 A 保育園 4 歳児 20 名・5 歳児 14 名において行われた「表現遊び」の授業実践(全 3 回)と事後検討会(全 3 回)を研究対象とした.

4 歳児クラスの担任は,前年度も 4 歳児の担任であった C(女性:教職歴 7 年)であり,これまでの担任経験を振り返りながら熱心に取り組んでいる.5 歳児クラスの担任は,初めての 5 歳児の担任経験となる D(男性:教職歴 5 年)であり,初めての年長児担任に戸惑いながらも意欲的に取り組んでいる.

今回,4・5 歳児クラスに着目した理由としては,毎年 9 月に実施されている運動会に合同で発表していくことだけでなく,例年,外部からの運動指導員に作品の振付・構成・指導など全て任せていたものを 2019 年度は 4・5 歳児担任保育士が担当し,子どもたちの現状を把握した上で指導計画を考えていく変化が求められていたためである.しかし,今まで運動会作品の振付・構成・指導の経験が乏しい担任保育士のため,本研究による毎月 1 回の表現運動指導を行い,担任保育士にとって運動会発表に向けた学びとなるように計画された.

また,各担任保育士が授業観察者となり園児の指導から離れることで,教材について・指導方法について・園児の反応について学ぶ研修の機会になるようにした.

そのため,研究対象である「表現リズム遊び」の授業実践(全 3 回)での授業者は研究者 B が行い,担任保育士は観察者となった.事後検討会(全 3 回)では園の勤務体制の関係から,担任保育士 1 人ずつと授業者が振り返りを行う形となった.第 3 回目の事後検討会のみ,担任保育士 2 名と一緒に行うこととなった.

調査の方法としては,毎回の授業後,学習者の状況や授業観察の記録をもとに事後検討会を行い,観察者の気付きや意見を中心に教材の可能性を検討するアクションリサーチを実施した.

2. 実践内容

第 1 回目は「とっとこハム太郎」のリズムと歌詞に合わせて走り,止まり,1 人でポーズ,または 2 人でペアになるポーズを作る内容として,その間のリズムの取り方やポーズの形は自由表現とした.

第 2 回目は「Samba De Janeiro」のリズムに合わせてトランポリンやフロアで飛び跳ねる内容とした.「両足ジャンプ」「片足交互ジャンプ(かけっこ)」の 2 つの動きの使い分けは課題としたが,全身を使ったジャンプと最後に止まるポーズの形は自由表現とした.

第 3 回目は「Samba De Janeiro」のリズムに合わせてフロアで飛び跳ねる内容とした.「両足ジャンプ」「片足交互ジャンプ(かけっこ)」の 2 つの動きの使い分けは前

回同様の課題としたが,後半に自分なりの動きで自由に踊るパートと止まるポーズの形は自由表現とした.

表１　授業実践と検討会

回	月	日	曜日	取組	内容
①	6	21	金	表現授業30分	ペアでリズムを楽しむ
				(4/5歳児)	使用曲：とっとこハム太郎
				事後検討会(授業者B / 観察者C・D)	
②	7	19	金	表現授業30分	トランポリンでリズムを楽しむ
				(4/5歳児)	使用曲：Samba De Janeiro
				事後検討会(授業者B / 観察者C・D)	
③	8	28	水	表現授業30分	自分なりの動きでリズムを楽しむ
				(4/5歳児)	使用曲：Samba De Janeiro
				事後検討会(授業者B / 観察者C・D)	

＊第3回目の事後検討会は日程の都合上、観察者である担任保育士Cと担任保育士Dの２名一緒に実施した。

今回の実践内容は高田[11]の「リズムのダンスの学習指導においては,ダンス領域特有のゴールフリーという目標を設定しながらも,必要な技能の獲得を導入とし,そこから,自己と集団の独自のダンスを追求していくことを目指すような単元構成や授業計画が必要である」とする提案を元に,「ポーズ」「両足ジャンプ」「片足交互ジャンプ(かけっこ)」を必要な動きとしながら,ゴールフリーという目標に向かって自由表現を行う内容を設定した．そして,「自分なりに表現して楽しむ」活動を重視して取り組むように行った.

３．収集データ

1)学習者の状況

・毎授業時の映像撮影(授業者と園児の動きや様子などを記録)

2)観察

・授業観察者による園児の動きや様子を記述分析したフィールドノーツ

3)授業者・観察によるリフレクション

・授業後に実施した授業者と観察者による授業検討会の逐語記録

4)授業ごとのリフレクション

・収集したデータを参考に,授業実践で「今」「何が」起こっているのか明らかにし教材の可能性を探る検討会

Ⅲ．結果

１．事後検討会の過程

1)授業者・観察者によるリフレクション

リフレクションでは授業者（研究者）B と観察者（担任保育士）C・D による議論の部分を取り上げ,観察者（担任保育士）C・D の変容を探った.

2)事後検討会における議論の要点

授業後の検討会は,以下の内容を中心に議論した.

・授業における運動課題
・子どもの様子
・運動会に向けた取り組み

そして,検討会では観察者からの気付き･意見を始めに聞き,それを検討会の話題としていった.これは指導熟練者である授業者からの振り返りや意見を始めに聞くと,観察者からの異なる意見や考えが出にくいことを考慮して,観察者の気付きを大切にしていく工夫とした.また,この「表現リズム遊び」の授業実践(全３回)を生かして,担任の指導による運動会作品が進められるよう授業者(研究者)と共に「表現リズム遊び」改善の視点を整理していった.

検討会での用語

1.検討会参加者の表記
　…授業者（大学教員/研究者 B)
　…観察者（担任保育士 C)
　…観察者（担任保育士 D)
2.考察内容からカットしている会話
　…逐語記録の中で相づちやうなずきなど話題に直接関わらない会話
3.発言の中の(　)で囲む文言
　…発言の意図を伝えるための補足

抽出部分①②③の記号は以下の検討会を示す。
①・・・第１回目　事後検討会
②・・・第２回目　事後検討会
③・・・第３回目　事後検討会

そこで本研究では,議論の中から観察者(担任保育士 C/担任保育士 D)の指導観が表れた部分を抽出して記述する.

まず事前に観察者 2 名のこれまでの表現リズム遊び(ダンス)経験についてインタビューを行った．２名の担任保育士はいずれも大学生時代や保育士でダンスを一から創る経験はあるが,曲に合わせて振付を考える活動であり,リズムに合わせて自由に表現する経験は無かった.

表２　表現運動の経験

	担任保育士C	担任保育士D
小学校	組体操・リズムダンス・民舞	組体操・リズムダンス
中学校	創作ダンス	組体操
高校	創作ダンス	無し
大学	大学祭で振付ダンスを創る	表現発表会で振付ダンスを創る
保育士	4・5歳児の振付ダンスを創る	3歳児の振付ダンスを創る

担任保育士Ｃは,自由に動くことが苦手で,決まった動きをする方がやりやすい,との思いをもっていた.担任保育士 D は,保護者から好評であった振付ダンスを保育士の同僚と創ったが,子ども目線で良いものであったかは疑問をもっていた.

また,担任保育士 D からはこれらの経験を通じて表現に対して興味深い話があった

【担任保育士D】ダンス表現で言うと結局表現と言いながらやることは決まっているので自己流の表現は無いですよね.振付師が考えた表現を子どもがやっている.またはやらされている,っていう感じですかね.

担任保育士Ｄは,ダンスの中に振付と自由表現があり,振付では子どもたちがやらされていると感じる場面もあり,自由表現との違いをとらえていた.

2 人の担任保育士共に振付ダンスと自由表現の違いは把握しているものの自由表現の経験が少ないことが明らかとなった.表 3 はその後実施された 3 回の事後検討会における主な気付き・意見をまとめたものである.

表３　事後検討会における気付き・意見

回	担任保育士C	担任保育士D
（1）授業における運動課題について		
①	きまりがないこと（自由）に対して全部無しにする（ことに抵抗感がある）	止まりたいから止まっているのか,止まれと言われたから止まったのか（疑問がある）
②	きっかけとして前で(お手本の動きを)してあげる(提案)	こっち(指導者)が変に声をかけるとそれに固定されてしまう(不安感がある)
③	「立ったり座ったり」の繰り返し動作に不安	
（2）子どもたちの様子について		
①	「楽しそうだな,おもしろそうだな,やってみたいな」という姿が見られた	ゲーム感覚になっていることで(取り組む)順番も守れて楽しめた
②	楽しめている子はいろんな表情や大胆な動きが見られた	(今まで)決まった動きをしてきた分、決まった動きで止まっている子は結構いる
③	少しの人数よりみんなで楽しくやるのが良く楽しそう	やらされている感じゃなくて、自然に動きが出てくる意識があった
	個別に挑戦する場も良かった	自由にやっていたのが多分本来の姿
（3）運動会に向けて		
①	子どもたちの表現を大事にする部分と運動会で見てもらう場面をどう合わせるか	子どもたちが自分なりに止まりながら楽しめる
②	運動会で見られることを気にせずに発表できたらいい	決められたダンスだと決められた答えしか返ってこないが個々によって動きをした理由が違う
③	子どもが楽しいとか感じることが一番	その子なりに真剣に表現しているので,今までと違った何かが芽生えていく

（1）授業における運動課題について

授業で扱った運動課題については表 3 のように第 1 回目と第 2 回目において二者で異なる意見が出た.第 3 回目は共通意見ではあるが表現に関わる部分ではないため，第 1 回目と第 2 回目について検討する.

第 1 回事後検討会では「止まるポーズ」について話題が多く挙がったが,今回の取組は自由表現がねらいであることから今後「自由に動く」ことを運動課題にして取り組むことを確認した.

【担任保育士C】①私とかは戸惑うタイプなので,(止まるポーズに)きまりがないことに対して全部無しにするのではなく,(中略)そういうの(きまり)がないと困るのかな,と思って.子どもたちの表現を大事にする部分と運動会という見てもらう場面なのでそれをどこまで合わせていくのか.

【担任保育士D】①曲を変えて同じことができるのかな,って思ったりします.(中略)止まりたいから止まっているのか,止まれと言われたから止まったのか.

しかし,「止まるポーズ」も表現と捉えると,担任保育士 C からは「きまり・きっかけ」を求める意見が出た.担任保育士 D からは,「止まりたいから止まっているのか,止まれと言われたから止まったのか,曲がそうだから止まったのか」と止まるきっかけ自体について思考する意見が出た.

第 2 回事後検討会では,動きやポーズが固定されている(変わらない)子に対してのアプローチで二者の意見は異なった.

【担任保育士 C】②先生がちょっと前である程度何パターンか見本があったほうが子どもも自分で考えるのが難しい子は真似をするし,やりたい子はそれがきっかけになっていろんな動きが出てくるので,最初のきっかけとして前でしてあげるというのは今日はあった方が良かったのかな,と思いました.

【担任保育士 D】②こっちが変に声をかけるとそれに固定されてしまうのが,それはちょっと「ダンスの中の表現」になってしまい,「表現の中のダンス」じゃなくて「ダンスの中の表現」になってしまうので,なんかそれは違うかな,と.別に「こうした方がいいんじゃない」とか声をかけるとかよりは,それこそ自分で気づいてじゃないですけど「こうした方が面白いかな」って自分で考えて.

担任保育士 C は「きっかけとして前で(お手本の動きを)してあげる」と考えたのに対し,担任保育士Dは「こっちが変に声をかけるとそれに固定されてしまう」と自分からの気付きを待つ考えがみられた.

担任保育士 C の「きっかけ」を求める意見は,本人の「自由に動くことが苦手で,決まった動きをする方がやりやすい」経験や「運動会に向けての活動」を意識したものと考えられる.

担任保育士Dは「止まるきっかけ」や「ダンス(形)が先か,表現(思い)が先か」など表現の根源について思考する姿がみられた.

（2）子どもたちの様子について

表 3 のように担任保育士どちらからも表現リズム遊びを楽しんで動く子どもたちの姿が伝えられ,自由表現に対して肯定的な意見が聞かれた.

第 2 回目に担任保育士 D の気付きに「決まった動きで止まっている子が結構いる」とあるが,きっかけを与えるのではなく「こうした方が面白いかな」って自分で考えてほしい思いがみられた.

（3）運動会に向けて

3 回の活動を通して運動会に向けてどのように取り組んでいくのか話題になったが,表 3 のようにいずれの担任保育士からも自分なりの表現をする子どもたちを生かしていきたい考えがみられた.

その一方で,担任保育士Cからは疑問も出てきた.

【担任保育士C】①見せ方を保護者の人たちにも「これは自分のタイミングで曲に合わせて動いたり止まったりしているんです」ってわかった上で保護者が見るのと,その頭が無しで見るのでは全然見方が変わってくる.(私たちは)面白いな,楽しそうだな,って見れるけど,そこのすり合わせが無いと「何しているんだろう」ってなってしまうから,子どもたちの表現を大事にする部分と運動会という見てもらう場面なのでそれをどこまで合わせていくのか,合わせはいるのかなと思います.
②今日はすごく楽しそうでとっても表情も良かったので,運動会の見られる立場になった時も見られることをあんまり気にせずに発表できるようにしていけたらいいな.
③普段の保育の中で取り入れるんだったらできるかな,と思うんですけど,それを運動会に向けてやっていく中では,ちょっと初めてというのもあるんですけど.

【担任保育士 D】②今までのだったら,決まった踊りをしているから「なんでああいう踊りになったの」「だって言われたもん」って言って終わりじゃないですか.だけど今の(自由表現)だったら,いや,「なんかわからんけど,その時楽しかったからそうなっちゃった」ってあるだろうし,「友達のを見てからちょっとやってみた」というのもあるだろうし,動きをした理由が個々によって違うだろうな,と思います.決められたダンスだと決められた答えしか返ってこない.

【担任保育士D】③普通のダンス(振付ダンス)だと自分のなりの表現を出すときはみんなとダンスが違ってくるから,多分叱られたりすると思うんですけど,それが一人一人違ってもその子なりに真剣にダンスしているし,その子なりに真剣に表現しているので,それは多分子どもたちの中で今までと違った何かが芽生えていくのかな,っていうのは思って.

今まで発表してきていない取組だけに,運動会を見る保護者に対してどのように理解をしてもらうか,という点である．保護者がこれまでの価値観で子どもたちの様子を見た時に「何をしているんだろう」と思われるのではないかという不安である.

Ⅳ．考察

今回の授業を通し,2名の担任保育士からは表現リズム遊びにおける自由表現に対して肯定的な意見が多く聞かれた．事前に自由表現について未経験にも関わらず,3回目の授業後には「自分で感じるまま自然に出てくる動き」「自由に楽しく,生き生きとしていて主体的に動いている」「自分の表現を引き出す」「やらされている感が無い」など本質的な部分に気付いた言葉が出てきた．このように子どもたちが音楽に合わせて踊るのを楽しむ様子や表情豊かな姿に担任保育士は気づき，自由表現に対する意識の変容がみられた.

2回目の授業の後,担任保育士Cからは「表情が良かったので運動会に生かしたい」という意欲も見られた．取組の当初,振付が無く運動会作品への見通しが見えない表現リズム遊びに不安を感じていた担任保育士であるが「できるかなあ,どうかなあ,という不安より『楽しそうだな,おもしろそうだな,やってみたいな』という方が子どもたちにもあったんじゃないかな」という子どもたちの姿に気づくことで担任保育士も子どもたちの変容を楽しむ場面が出てきた．本研究の取組からは表現領域「自分なりに表現して楽しむ」・健康領域「自分の体を十分に動かし,進んで運動しよう」のねらいに向かう活動が生まれ,担任保育士それぞれに意識の変容もみられた.

しかし,1～3回目の担任保育士Cからは運動会について「子どもたちの表現を大事にする部分と運動会という見てもらう場面なのでそれをどこまで合わせていくのか」「運動会の見られる立場になった時」「運動会に向けてやっていく中では,ちょっと」という声が出た．運動会に向けては今回の「表現リズム遊び」とは異なりこれまでは,見せることを意識した作品作り・集団で揃えていく動き・出来るように取り組む指導などが行われてきており,その部分が欠けている点に不安が出てきた.

この点については、“体育祭振付ダンスの練習とその本番”を「表現運動」とする学校文化の存在やこれまでの取り組み方が垣間みれる．運動会に向けて外部講師の一斉指導による振付指導から集団で揃える動きを明確にして,その部分を出来るように模倣して練習を繰り返すこれまでの取り組み方である．これは現在の課題として報告されており，自由表現の取組での担任保育士Cの意見は多くの保育士が抱える点であると考えられる.

自由表現をねらいとした表現リズム遊びには担任保育士から子どもたちの学びとして一定の評価が得られた．そして,自由表現をねらいとする活動を取り組むことで,表現・健康領域で育ってほしい姿を確認しつつ保育士の意識の変容が進んだ.

しかし，身体表現の学びを発表する場として「運動会」が活用されている現状に対しては,日常で取り組む活動の良さを運動会作品などで披露する実践の積み上げと検討が今後も求められる.

文献

1)青木由利子(2013)「リズムダンス」⇒リズムに乗ってのりのりダンス！,女子体育,第55巻 第8・9号,54-59

2)原田奈名子(2002)ダンスの授業づくり,「体育科教育学入門」(高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編),219-226,大修館書店,東京

3)本間知可(2017)リズムダンスにおける即興表現の楽しさを味わわせる指導の工夫 -「やってみる・ひろげる」を位置付けたゴールフリー学習を通して -,教育実践研究,第27集,145-150

4)飯田正江(1985)運動会における幼児の創作舞踊(身体表現)の意義,(上田女子短期大学)紀要,8号,1-22

5)伊藤美智子・岡沢祥訓・林信恵・北島順子(2000)ダンス授業における教師行動に関する研究:ダンス授業と他の体育授業との比較,大阪体育大学紀要,第31号,9-17

6)中村 恭子・浦井 孝夫(2006)ダンスの学習内容と楽しさの検討―創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較―,順天堂大学スポーツ健康科学研究,第10号,65-70

7)中村恭子・宮本乙女(2013)中学生のダンス経験とダンスイメージの変容,舞踊教育学研究,第15号,13-15

8)西村依子・川口千代(2005)表現運動の学習指導に関する

研究 - 「表現」と「リズムダンス」の指導の在り方を中心に - , 京都女子大学発達教育学部紀要, 第 01 号, 105-117
9) 大西祐司(2016)表現リズム遊び・リズムダンス・現代的なリズムのダンスにおける現状と課題 - 学習指導要領に導入されてからの文献を対象に - , びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第 13 号, 35-48
10) 高橋和子(2017)ダンスのある風景, 平成 28 年度武道等指導充実・資質向上支援事業「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策」スポーツ省, 5-7
11) 高田康史(2015)現代的なリズムのダンス授業の学習指導に関する研究 - ステップ習得学習に着目して - , 広島大学博士学位論文, 1-89
12) 山崎大志(2013)リズム DE 即興, 女子体育, 第 55 巻 第 8・9 号, 60-65
13) 安田美津子(1980)運動会における表現活動, 児童文化研究所所報, 2 号, 43-53

Changes in Early Childhood Educators' Awareness toward Free-Expression Dance with Rhythmic Music Focusing on the Working Process for a Performance at the Athletics Meet

OKI Junko, OHMI Nozomu and JURYOZAWA Narumi

Abstract

Although it is widely encouraged to provide children with opportunities to express emotion and thought using free body movement, and dance is recognized as an effective way to accomplish this, most schools still tend to teach dance in a formulaic way. One reason for this is that many teachers lack dance experience, especially free-expression dance to rhythmic music. In order to adopt free expression dance activities in early childhood education, an effective way has to be found to support schools as they consider adding this to their curriculum. This study aims to document the changing minds and thoughts of educators as they observe the teaching of free-expression dance to children, and how educators' beliefs regarding teaching methods can change. The study was conducted at a private nursery school in Japan. The participants were two teachers in charge of classes of four and five-year old children. For this research, the participants observed children's behavior and expressions during a free-expression dance class taught by an experienced teacher from a university. After their observation, the model teacher and the participants had reflection meetings. Data were collected from the films of the teaching sessions and the recordings and notes of the reflection meetings. The process of observing example lessons followed by reflection meetings was carried out three times, from June to August, 2019. The results imply that the teachers noticed the emotional aspects of children's expressions when the children enjoyed dancing to music, that the teachers showed an understanding of the effectiveness of free-expression dance, and that the teachers recognized the difference between an ordinary way of teaching dance and an approach that focuses on free expression.

Keywords : Early Childhood Education , Physical Expression Activity ,
Free-Expression Dance with Rhythmic Music, Action Research